

## 十二縁起について（四）

橋 浦 寛 照

阿含相應部經典等には十二支縁起の外に三支四支から九支十支等の縁起が説かれているから一般に十二縁起は三支四支等の縁起から發展して出来たものであらうとされている。しかし十二縁起の内容については殆んどの學者によって仏陀の悟りの經過を示すものとされているのである。

また十二縁起はマガダ語の經典や律藏等の仏滅後の早い時期の説で仏説と見て差支へなく勿論悟りの内容を説いているとする學者もいる。たゞ十二縁起を重視しないある學者は仏陀の悟りを説く古い經典に十二縁起はないとするが、十二縁起は阿含の諸支縁起では最も整ったものと見られていること、また一般に十二縁起を仏陀の悟りとしていることに特に否定もされていないこと等から見ても依然として十二縁起を措いては仏陀の悟りを語ることは出来ないものである。

かくて十二縁起は四諦説や三、四法印と同趣意とされたり十二縁起の理解にも因果から同時相依や同時相依と因果などの多様な解釈が行はれているのである。

然らば十二縁起は何故に仏陀の悟りとされるのであらうか、それはまた阿含の經典に説かれているのである、即ち上座部律藏仏伝、ウダーナ等到大覺成就の仏陀は十二縁起を順逆に思惟しそれ〴〵にウダーナを唱へられたがそれは有因の法と諸縁の滅尽を知って万法が明かとなり諸々の疑惑が悉く消え去れりと言ふもので即ち十二縁起の順逆觀で悟りの智慧が顯現したことを説かれてをり、又相應部等の他の經典にも成道の内觀は十二縁起であつたとされているからである。

そこでは十二縁起を仏陀の説とする學者はこれをそのまま認めるのは当然であるが十二縁起を簡単な縁起の發展と見る學者もその内容を仏陀の悟りを示すと見るから仏陀が十二縁起で悟つたとするこれらの經説を否定はしていないのである。それと共にまた「これあれば彼あり乃至これ滅すれば彼滅す」の相資相依の生滅觀所謂縁起は佛教の理念であるが相應部經典等に縁起として十二縁起が説かれているところから殆んどの學者は縁起即十二縁起としてそのまゝ仏陀の悟りと

されるようになってゐるからである。

しかしこゝで是等が検討されなければならない。それは十二縁起はそのまゝ仏陀の悟りの内容を示すとは思はれない。随つて縁起即十二縁起ではないと思はれるからである。相応部經典等に仏陀は十二縁起を「無明に縁つて行あり乃至生に縁つて老死愁悲苦憂悩あり」と「無明滅すれば行滅し乃至生滅すれば老死愁悲苦憂悩滅す」と説かれたとされている。これは十二縁起の順逆観であるが、こゝでは重要と思はれることに即ち十二縁起は「何に縁つて老死愁悲苦憂悩があるか」「何を滅すれば老死愁悲苦憂悩の滅があるか」とが最初の課題となつて成り立つから、その老死愁悲苦憂悩とその滅の縁起に限つてそれらの問題を考察したい。それらによつて十二縁起の内容も知ることが出来るからである。

先づ「生に縁つて老死愁悲苦憂悩あり」を見ようこの中の老死愁悲苦憂悩とは四諦に「老は苦なり病は苦なり死は苦なり」とあるように老死に対する老死の愁悲憂悩であるが、こゝではこの老死愁悲苦憂悩は生に縁るとして「生に縁つて老死愁悲苦憂悩あり」とされているのであるが然し「生に縁つて老死愁悲苦憂悩あり」とすれば生に老死愁悲苦憂悩がなければならぬが仏陀の生には既に老死愁悲苦憂悩がなかつた筈であつて生には老死愁悲憂悩の滅もなければならぬから生を必ずしも老死愁悲苦憂悩の縁とすることは出来ない故に

「生に縁つて老死愁悲苦憂悩あり」とは言へないのである。随つてまた「生の滅に縁つて老死愁悲苦憂悩滅す」についても生の滅に縁る老死愁悲苦憂悩の滅ではなくて仏陀は生を滅せずして老死愁悲苦憂悩を滅していられたから生の滅を老死愁悲苦憂悩滅の縁として「生の滅に縁つて老死愁悲苦憂悩滅す」とも言ふことは出来ないのである。蓋し十二縁起で生を老死愁悲苦憂悩の縁としているが仏陀は生をそれらの縁とはされていないと言ふこと仏陀の老死愁悲苦憂悩の縁とは四諦の一、二諦の關係から見て渴愛とされていることは明かである故に生を以て老死愁悲苦憂悩の縁として「生に縁つて老死愁悲苦憂悩あり」と「生滅すれば老死愁悲苦憂悩滅す」とする十二縁起は仏陀の説とは言はれないのである。

十二縁起には右の老死愁悲苦憂悩とその滅で終るものと老死とその滅で終るものとがあり後者は現在一般に用いられている十二縁起であるがこゝでその老死とその滅の縁起について考察しよう。

「生に縁つて老死あり」とあつて老死は生を縁としているがこゝでは老死は滅せらるべきものでありその縁の生も滅せられなければならない。かくて「生滅すれば老死滅す」として生も老死も否定されることになるがしかし仏陀は生も老死もあるがまゝに受入れられていて生も老死も否定されてはいないのである、仏陀の滅は苦の滅であつて老死の滅ではない

#### 十二縁起について（四）（橋 浦）

随つて老死とその滅を説く「生に縁つて老死あり」と「生滅すれば老死滅す」の縁起は仏陀の説ではないのである。

右で「生に縁つて老死愁悲苦憂悩あり」と「生に縁つて老死あり」との各々の順逆観の縁起の内容に矛盾を見たが次いでそれらはそのまゝ十二縁起の矛盾であることになる、それは十二縁起は「無明に縁つて行あり乃至生に縁つて老死あり」とその滅であるが前にも触れたがそれらは老死と老死滅の縁を追つて無明と無明滅に到つた説明であるから十二縁起は老死と老死滅を課題としそれを明かにするものつまり十二縁起は老死と老死滅を説くものでこれは老死愁悲苦憂悩とその滅の十二縁起も同じである、故にそれらの縁起に矛盾あればそれを課題とする十二縁起もそのまゝ矛盾と含むことになるからである。

次に縁起と十二縁起について見よう。相応部經典等に「縁起とは何か、無明に縁つて行あり乃至生に縁つて老死云々」とあるところから縁起即十二縁起とされて十二縁起が仏教の根本法仏陀の悟りとされているが果して縁起即十二縁起であらうか。さて仏陀の教は法とされている、それは仏陀は法を悟り法を説くものとされているからである。その法とは仏陀の出世不出世に抱はらぬ、自体として確立している理法それは相依性即ち縁起である所謂「法を見るものは縁起を見る」と言はれるがその法をいかに説かれたかは不明であるがかの

阿兌示が師の説として舍利弗に語つたとされる「諸法は因縁より生ず云々」の法身偈のもととなるものそれは「これあれば彼あり乃至これ滅すれば彼滅す」と定型化されるがこの中に仏陀の縁起・仏教の根本法を見るべきであらう、然るに既に老死等の縁起から十二縁起に矛盾あることが明かでこれら十二縁起と右の仏陀所証の法、縁起とは当然異なるもので決して縁起即十二縁起ではないのである。以上十二縁起は仏陀の悟りの内容とは思はれないこと、随つて仏陀の説かれた法・縁起は十二縁起でないこと、つまり十二縁起は仏陀の説でないことを見たのである。

従来十二縁起を仏陀の悟りの内容として十二縁起の順逆観を四諦の前後各二諦に配したり三、四法印は縁起で解すべきであるとされて十二縁起に当てられたりしていることには前回までその矛盾を指摘した。十二縁起の理解にも因果説から更に同時相依即ち論理的関係とする説の中の觀念の仕方とか法と法との関係とする見方にもその内容に齟齬を見た更に十二縁起を心理的、生理的経過の論理的と継起関係とか論理的と前後関係とかの説などがあつても、それらに沿つた確定した説明はない。宇井博士も「十二縁起は完全には分らない」と言はれたが現在も首肯される解釈はない。それは何故かつまりは十二縁起を仏陀の悟りとしているからである。

（東洋大学大学院修了・寺院住職）